鎌倉街道周辺遺跡（かまくらかいどうしゅうへん）

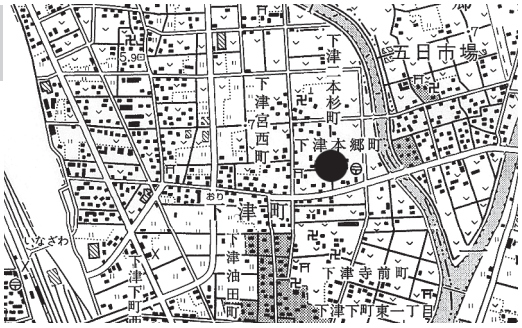
所　在　地　稲沢市下津本郷町・下津宮西町
（北緯35度15分19秒 東経136度49分52秒）

調査理由　県道名古屋豊山稲沢線建設

調査期間　平成22年4月～平成23年3月

調査面積　8,000㎡

担　当　者　樋上　昇・加藤雅士・奥野絵美



調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　県道名古屋豊山線建設に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。調査対象地は南北に約25～30m、東西に約500ｍと細長であるため、西からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅの５調査区を設定した。各調査区は現有道路や排土の事情から、さらに２～４に細分割して調査をおこなった。

立地と環境　本遺跡は青木川右岸に形成された標高６～７ｍの自然堤防上にあり、京鎌倉往還道と関連施設が想定される南北約３ｋｍ、東西約1.5ｋｍの範囲が指定されている。調査区の西方約300ｍには下津新町遺跡があり、古墳～近世の遺構が確認されている。同じく北方約500ｍには尾張の守護所である下津城があり、複数の塀を有する城郭であったことが確認されている。

調査の概要　調査地は、事業着手直前まで一部は宅地となっていたが、大部分は田畑として利用されており、中世の遺構が比較的良好に残っていた。出土する遺物は、ほぼ中世に限定されるようだ。

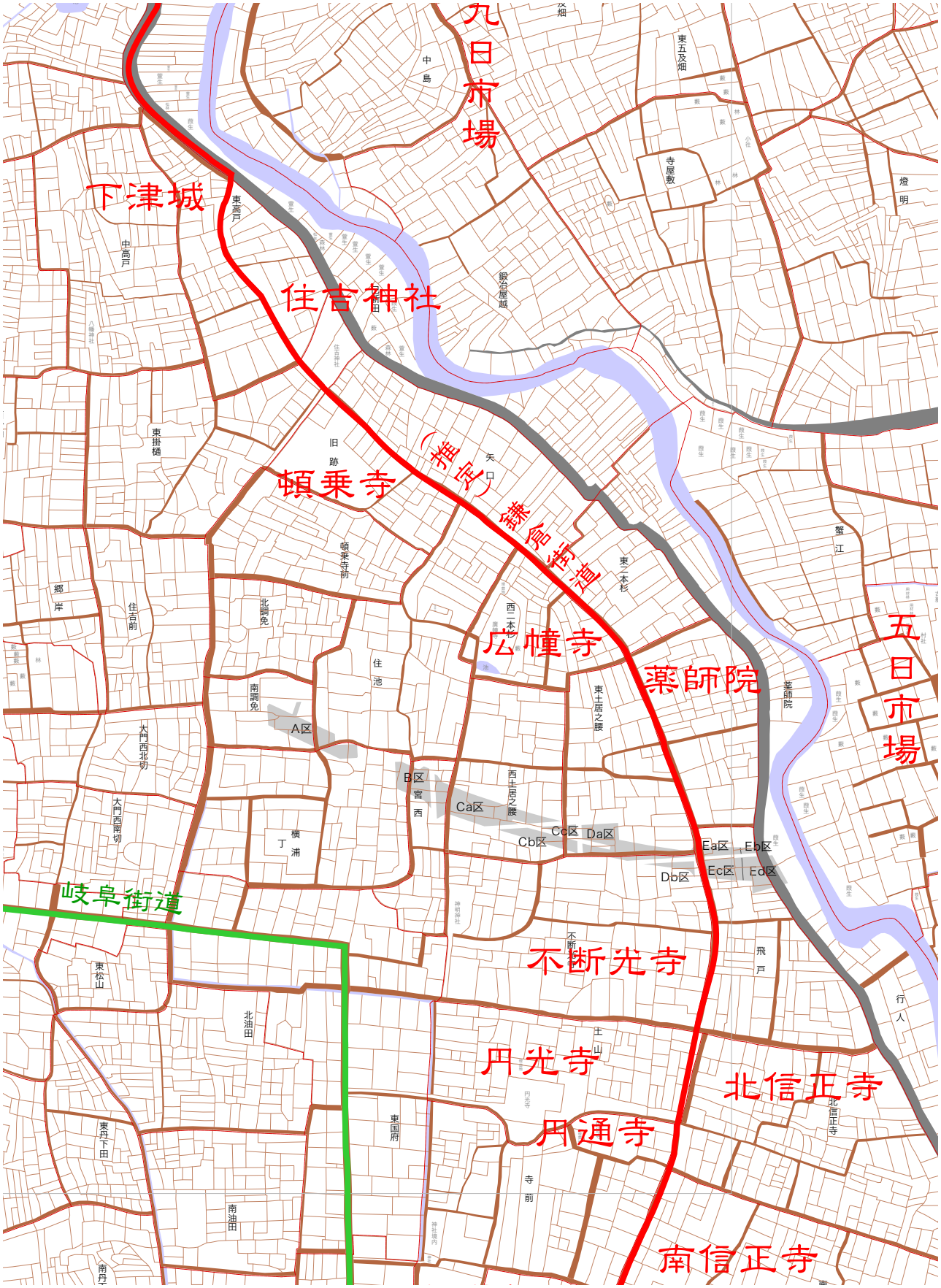
Ａ区では２面調査をおこなった。第１面が12・13世紀、第２面が14・15世紀を中心とする時期であり、各面で正方位を有する溝を数条検出している。調査区内では完結していないが、方形の区画溝であったと考えられ、墓の可能性がある隅丸長方の土坑を多く検出していることから宅地等として利用されていた可能性がある。またこれらの溝は、明治期の地籍図にみる地籍の境界線とほぼ一致しており、土地の変遷を考える上でも興味深い。

Ｂ区は調査区の約１／５が飛び石状に攪乱を受けており、遺構の遺存状況が良好ではなかったが、小土坑のほか、やはり区画溝と考えられる南北の溝を２条検出している。

Ｃ区は西からCa・Cc・Cb区に分割して調査をおこなった。Ca区西端とCb区東端付近で、南北方向の大溝を確認した。溝間の距離は約120mであり、地籍図からみて、一辺が100～120mの方形区画を有する居館となる可能性が高い。内部では、多数の柱穴・土坑と、居館内を細分する区画溝が認められる。

Ｄ区は現有道路を挟んでａ・ｂ区に細分した。Db区ついてはＥ区とあわせて記す。Da区では３面調査をおこなった。第１・２面では土器廃棄土坑を多く検出した。いずれも掘形が約１～1.5mの円形基調の土坑に、15世紀を中心とする土師皿類が数十個まとまった状況で検出した。饗宴等に伴う廃棄とみられ、本調査区の性格を考えるうえの手がかりとなることに加え、尾張の中世土師器編年を考えるうえでも今後、重要な一括資料になるだろう。地山である第３面では東西正方位の溝が繰り返し掘りなおされている状況を確認した。これも区画溝と考えられ、明治の地籍図にみる境界線とほぼ一致する。

Ｅ区およびDb区では南北に伸びる土手状の高まりを検出した。この高まりは、炭や土器細片が多く混じる整地土で作られており、高さは約0.4mある。Ｅ区のものは東西幅が約15m。長さは南北に約30mを確認しており、さらに調査区外へ続いている。土手の



発掘調査区と周辺の地籍図（1:50,000）

東の落ち際には平行する南北溝が掘られているが、西の落ち際には溝を確認していない。Db 区でも同様の高まりがあり、西の落ち際に溝が掘られるが、東側は調査区外にあり不明である。これら２つの関係は、間にある現有道路のためも不明な点もあるが、Ec 区では土手として完結していることから、２条の土手と考えられる。地籍図等から復原すると、高まりのある地点は鎌倉街道が想定される位置にあることから、これらが道路遺構であった可能性が強く疑われる。土手を形成する土の下層には、やはり整地とみられる層があり、木製でそれぞれ方形と円形の枠をもつ井戸を計３基検出している。また下層の断面観察では、河川の流跡を確認したほか、古い段階の整地土が河川の離水に伴う浸食等による影響を受けている様子を確認しており、旧青木川と土地利用のありかたについての知見を得た。

ま　と　め　　まず調査地では、ほぼ中世に限定できる遺構・遺物が比較的良好に残存していることを確認し、そこでは整地等の大規模な造成がおこなわれていたことが明らかになった。東

Ａ区上面全景（西から）

Ａ区下面全景（西から）

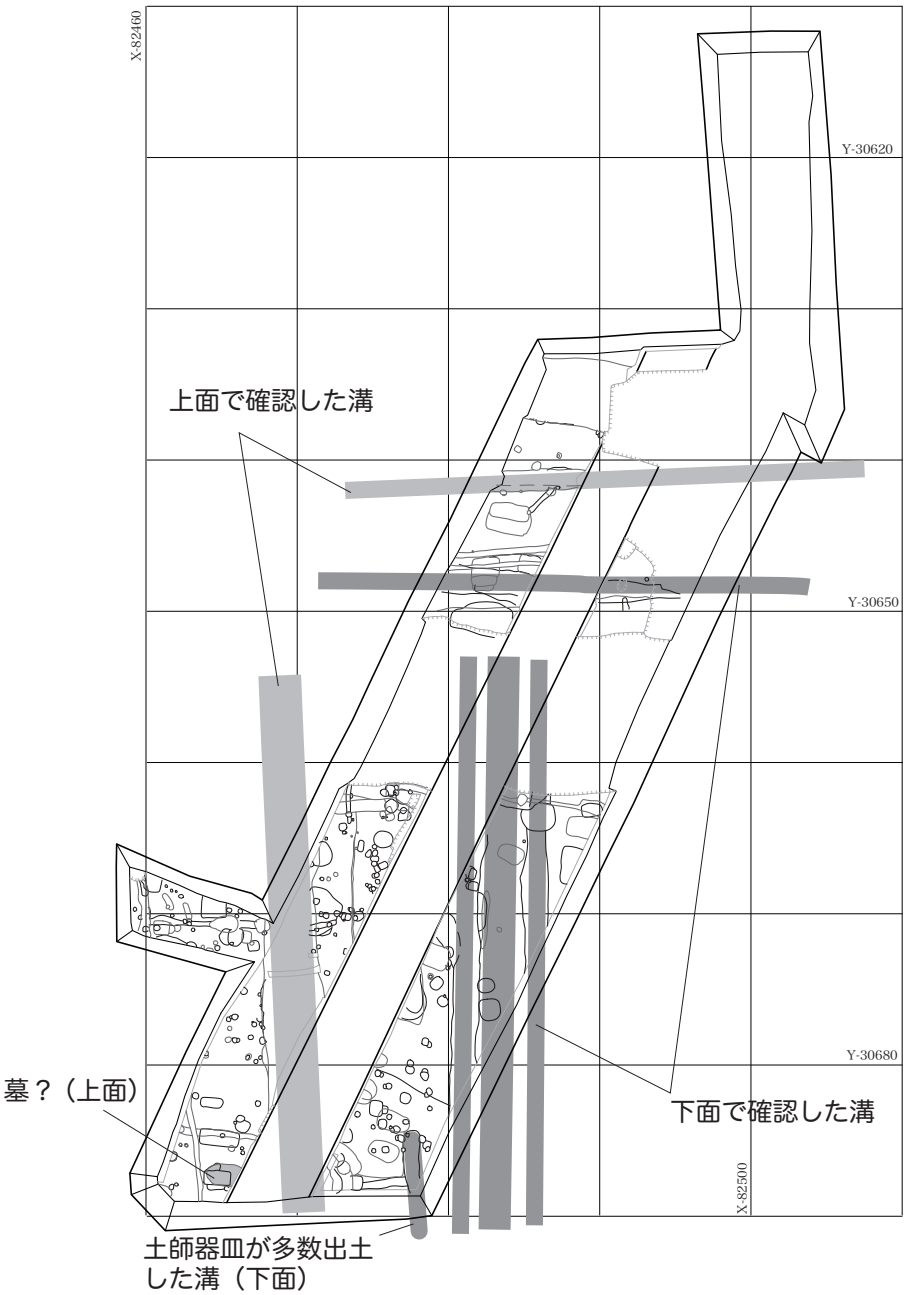
Ａ区上面薬研掘りの南北溝（北より）

Ａ区下面東西方向の大溝群（東より）

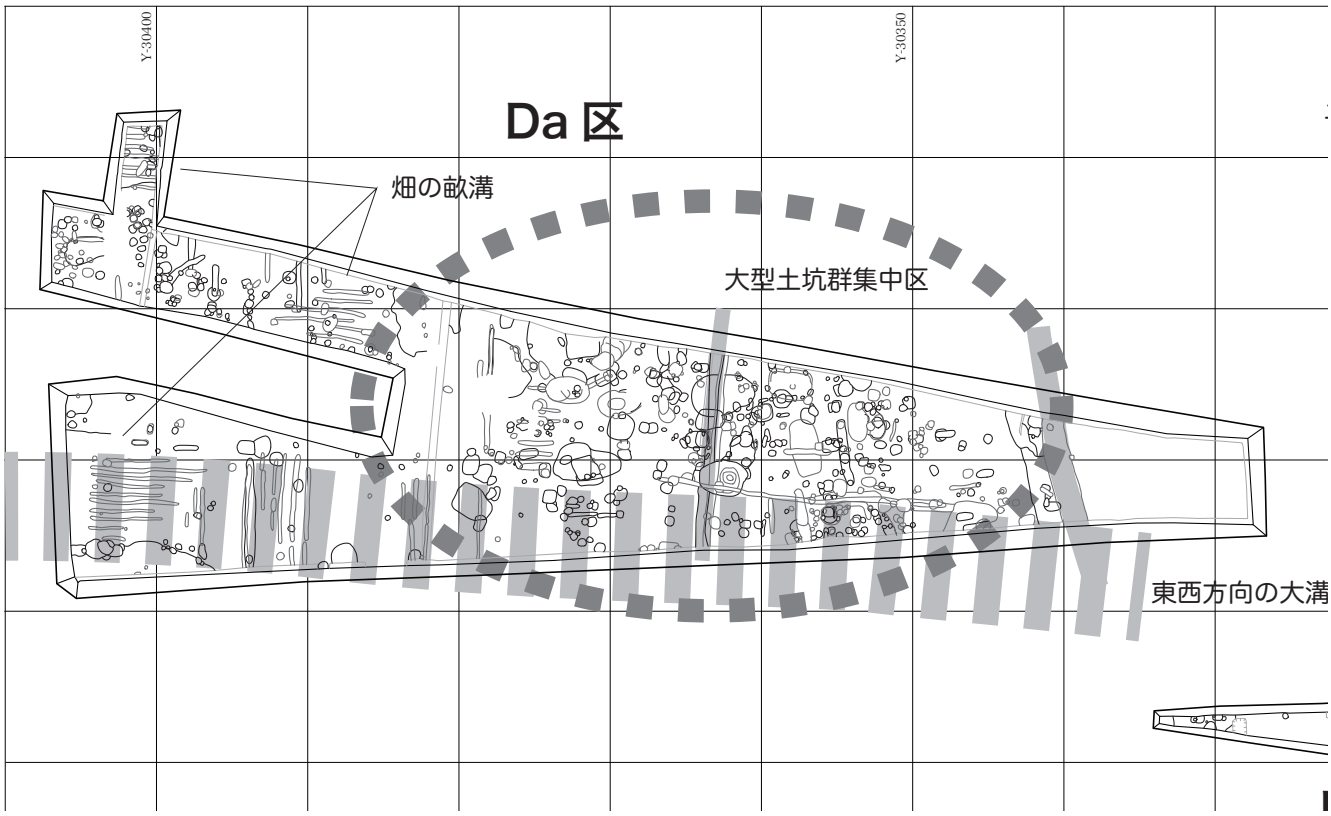
Ａ区上面墓の可能性の高い土坑（南西から）

Ａ区下面土師器皿が多数出土した溝（東から）

西に長い調査区では遺構に加え、山茶碗の出土が多いＡ区に対して土師器の皿や煮炊具の多いＤ区など地点差が認められ、それぞれで土地利用の性格が異なった可能性が強い。そこにはDb・Ｅ区の土手状の高まりが関連を疑われる、鎌倉街道との距離に関係があるとみられ、時期的変遷も踏まえて検討してゆく必要があるとともに、今後の周辺での調査ではより精度の高い調査が求められる。　（加藤雅士・樋上　昇）

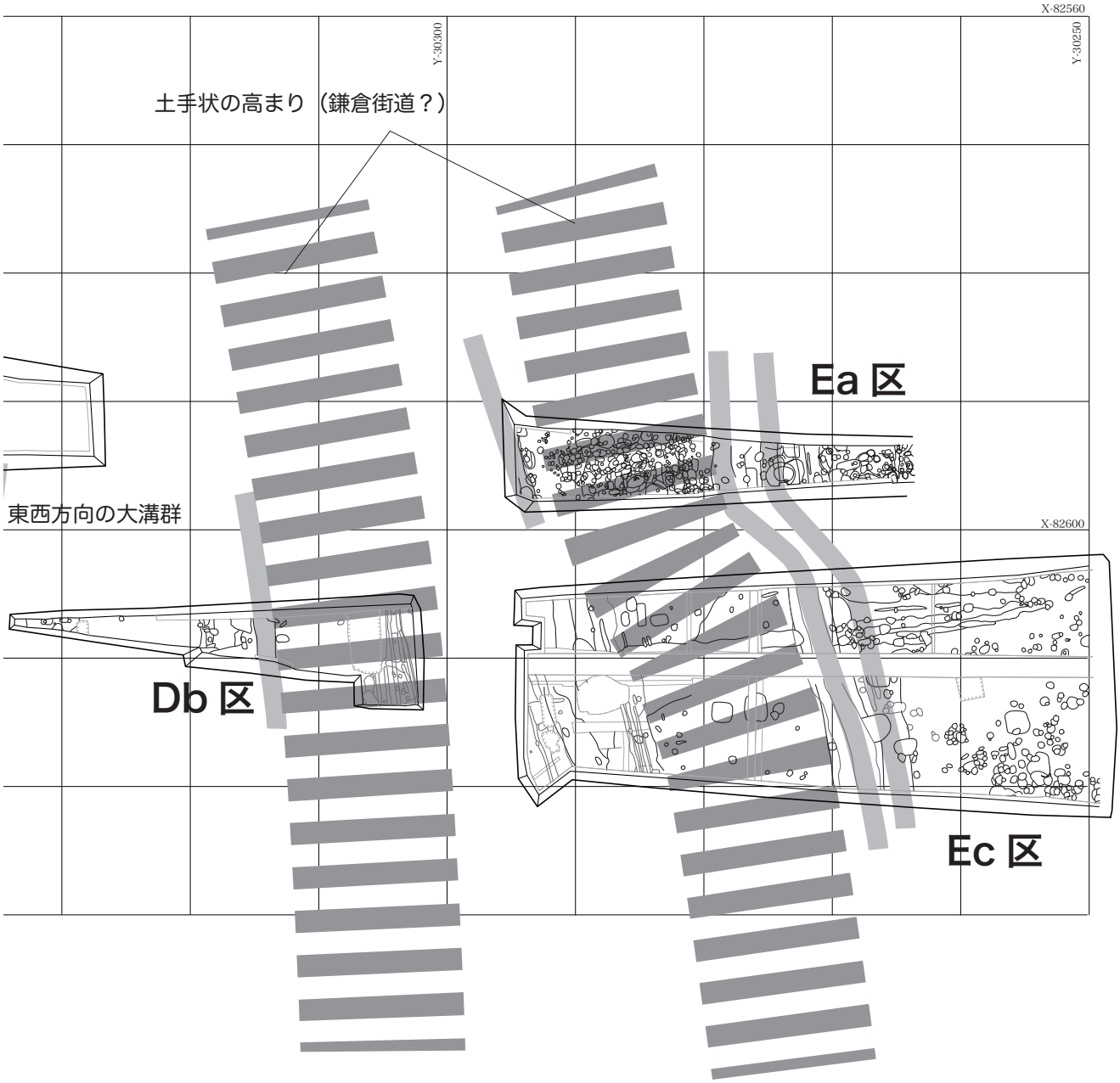


Ａ区遺構図（1:500）



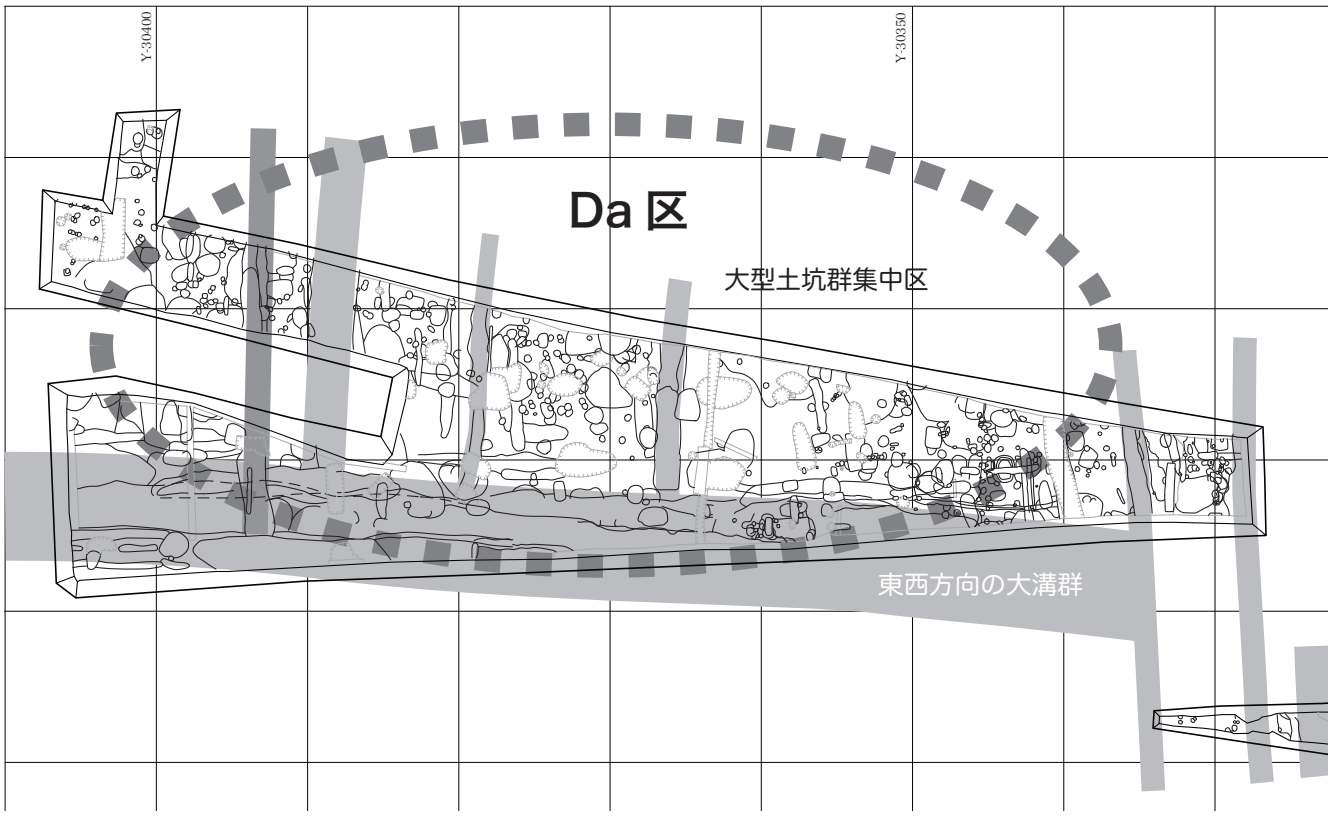
D･E区1・2面遺構図西側（1:500）

D区上面全景（東から）



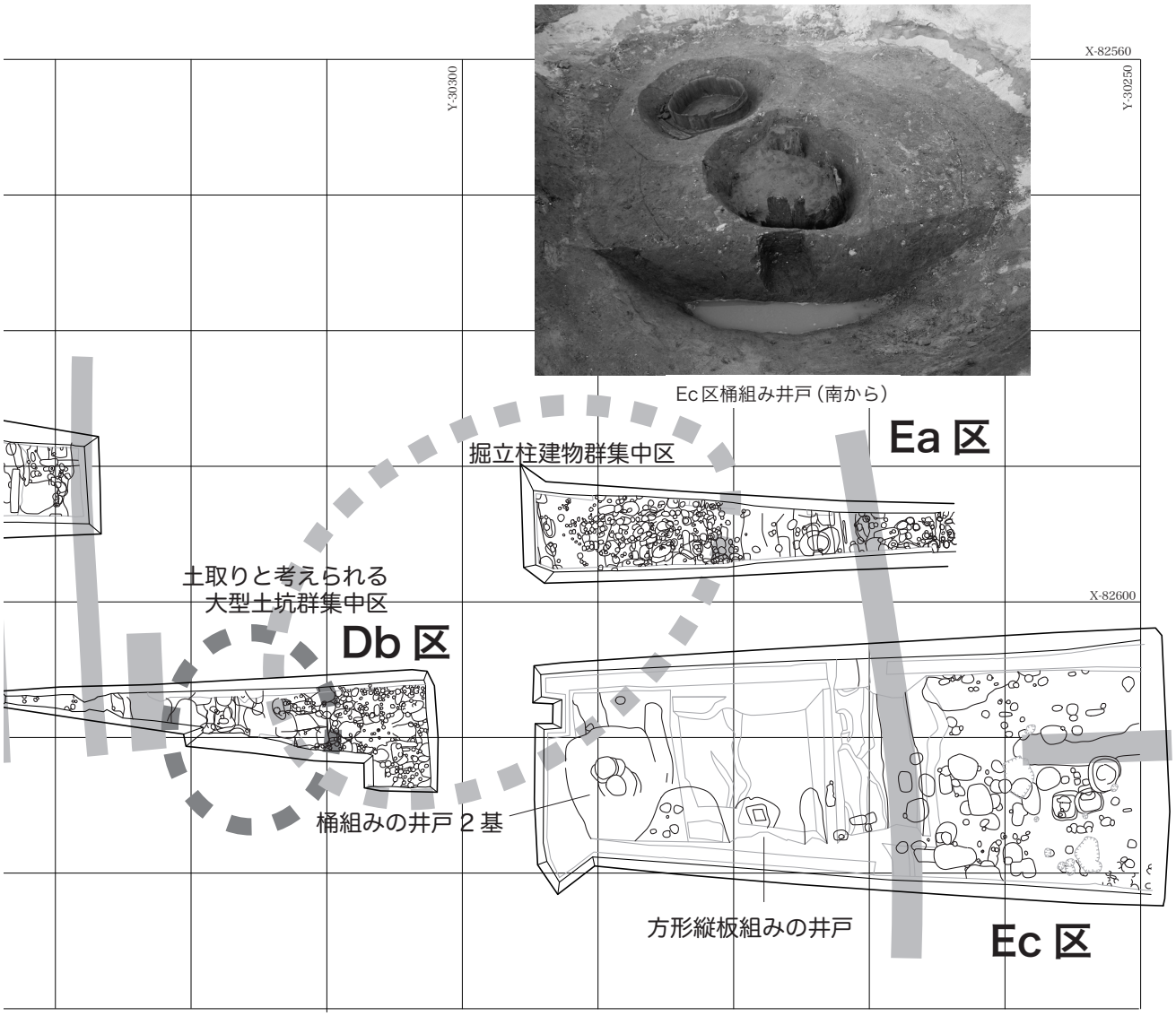
D･E区1・2面遺構図東側（1:500）

Ec区土手状の高まり（南から）



D･E区3面遺構図西側（1:500）

D区下面全景（東から）



D･E区3面遺構図東側（1:500）

E区下面全景（東から）

Ec区方形縦板組み井戸（北から）